

死の淵からの生還



田鍋 一樹

私の素性

私は中西喜彦氏の義理の弟です。氏の妹の康子と結婚してすでに50余年になります。年は79歳です。前の住友金属工業鹿島製鉄所に勤務していた縁で現在茨城県鹿嶋市に住んでいます。鹿児島出身の私が鹿嶋に住んでいるのも不思議です。この度、喜彦氏に、「炉ばたセイ談」の話をされ、書いてみないかとお誘いを受けました。私が死の淵から生還したとの内容です。冊子を拝見して、鹿児島の名だたる方々を書いておられることを目の当たりにして、とても私の任ではないと辞退し

ました。しかし話題を問わずお互いの啓蒙のための会で誰でも堅苦しくない、硬軟、左右何でもありとのこと、それだったらと筆を執る次第です。

社会的には、当地鹿嶋で、NPO法人「鹿嶋省エネ研究会」を立ち上げ細々と活動しています。当時の住友金属鹿島製鉄所環境エネルギー部から、経済産業省傘下の財団法人省エネセンターに向となり長年その国際部門に勤めておりました。当時ODAの海外支援は、主に産業分野に限られており民生部門は海外では大変人気がありました。翻って日本の民生部門の省エネ意識は、途上国に比べても劣るとも優らない実情でした。結構困難な中で活動を続けているのですが、少し過労が重なっております

鹿嶋記念病院に担ぎ込まれ1回目の手術

そのような時に家の庭の樹木を剪定しました。思わず一所懸命にやりました。いつも通り夕食を取り、炬燵に入ってしまった。いつもと妻が何度声をかけてもうつろな返事で、ちよつとおかしいと思ひ救急車を呼びました。令和2年2月28日のことでした。その後のことを私は全く記憶にないのですが、大変なことだったようです。以下は妻の入院記録に沿って記載するものです。

救急車で当地鹿嶋の小山記念病院に運びこまれました。私は意識を完全に失い治療に入ったのですが、途中3回も心肺停止状態になりました。息子夫婦と孫も病院に駆けつけました。寒い待合室で待っていました。3回目心肺停止の後、小生の治療について、心肺停止状態を蘇生させるかどうか、また蘇生させるとしたらそれなりに危険も伴うとのことで、どうするかを医者は息子に相談しまし

た。息子は何とか一命を救ってほしいと頼んだ由です。

私は完全に意識を失っている状態でしたが心肺蘇生を行い心筋梗塞の治療となりました。手術は、集中治療室に入り、今病院で手術を受ける中で一番の重症患者であるとのことで、人工呼吸器の装着と右脚のふくらはぎに血圧アップポンプを巻き血管管理を行って頂きました。手術には夜だったにも拘らず主治医の循環器科の江角先生が駆け付けて下さり若い新井先生と対応されました。冠状動脈にステントを入れる手術を受けました。左心臓の太い血管が2本、そして細い血管もガチガチに固まっているとのことでしたが、まず2本の太い血管に何とかステントを入れる手術は終了しました。

2 回目の手術

3回も心臓が停止しているので脳にどの

ような影響を及ぼしたかまだ分からない。現状は心臓の3分の1しか使われていない状況でそれだけ体は無理をしている。そして1回目の手術が終わった後、今のところ心肺停止はないが、薬と人工呼吸器でギリギリ安定している。一番悪い時より多少良くなっている。細い血管にも2か所ステントを入れるトライを3月5日行う。機械式のサポートの後心臓がより頑張らないといけないのでより強い心不全を起こす可能性がある。但し、細部の血管が働いて血液が流れるようになれば心臓も大分違うということで、家族は手術の成功を祈りました。

手術が無事終わり仰向けに休んでおりました。妻が足を下から上にマッサージしながら「お父さん、康子ですよ」と呼びかけましたが目を開けたものの見てはいないようでした。まだ人工呼吸器や足首のポンプはそのま

まであり、鼻から酸素を入れて点滴で栄養補給している状態でした。3月11日ナースと新井先生が、ベッドを囲み呼吸器を外してくれました。呼吸器が取れて酸素吸入器になり大部楽になりましたが、体中に管がはい回り長いこと人工呼吸器を装着していたせいか、口の周りの傷が痛々しい状況でした。

蘇生と入院の不思議

3月12日新井先生が来られ「ここは病院ですよ。判りますかー」と大きな声で聴かれましたが明確な反応はなく指を一寸動かす状態でした。しかしこの頃、新井先生曰く1カ月くらいして徐々に意識がもどってくる。

3回も心臓が止まったことから頭にどう影響しているかわかりませんとのことでした。集中治療室から一般病棟に移されて意識がある程度戻ったからと思うのですが、私は実に変な思いでした。それは何で自分はここに入院

しているのだろう、あれほど元気に庭の剪定や省エネ推進活動に頑張っていたのに一体何故なのだ。と自問自答していました。そのことを康子に聞くと康子は「何言っているの、大変だったのよ」と顛末を話してくれました。まさしく死の淵をさまよっていたのだと思います。入院してから一般病棟に移るまでの約20日間のことが、天の恵みか全く記憶に無かったのです。

変な夢

そしてその後不思議な夢を見続けました。夢はあまりに長く、一夜の夢にしては、内容が多すぎるのです。夢の続き物を毎夜見ていたのだろうかと思いました。そして現実の世界で、あれっ、これ夢で見たよなーという思いもあり、夢だったか、現実だったかわからなくなります。夢は、ある時は浜辺でミュージックを歌い、そして広大な農場を旅して豊

かな生活を送り、ある時は仙人に会って色々な話をしており、また砂漠のようなところの一軒家に行つて過ごした話や、海外の屋敷に滞在して家人や使用人にとてもよくしてもらったことなどで、語りつくせません。最後はいつもいかに心臓病から脱却するかという話に結び付きました。これは決して一夜で見る夢ではない。今もって不思議な気がしてなりません。

その後の生活と所感

2月28日に入院して、5月6日退院するまで68日間も入院していたのです。幸い脳障害は起こらず記憶も段々戻ってきました。退院後、散歩のリハビリを行いながら生活しています。妻はずーっと付き添ってくれています。歩く速度は妻の方が早く、ついていくのが大変です。妻からの最もつらい質問は、「あなたは何が目的で、何のために生きてい



茨城県鹿嶋市の自宅にて著者



七夕飾り：自宅の前で妻康子と

るの」と聞かれることです。これだけの経験をしていながら、なぜ生きているのか全く「これだっ」という気が起こらないのです。やむを得ず「そうさな」と言葉を濁してしまいます。

思えば意識も少しずつ回復していた頃から、妻は色々と伝授してくれました。鹿嶋省エネ研究会の報告書のこと、狩谷君や村上君がきっちり対応してくれたこと、中西さんの兄弟が大変心配してくれていたこと、鹿児島のももも相当心配して手紙などくれたこと等々です。退院して医者に診断してもらったとき主治医の江角先生が、「もう死んでいる状態で棺桶から引きずり出したのだ。あの手術は私がいなければできなかった」と話されました。私は死の淵から生還しました。九死に一生を得ました。自分はなぜ生かされたのだろう、ひよっとしてご先祖様のご守護かと、背後に

何かを感じ妻と話しつつ、今年も七夕を迎えることが出来ました。

妻の献身的な介護と入院の細かな記録にとっても感謝している次第です。

(NPO法人「鹿嶋省エネ研究会」会長)

